Osaka University Knowledge Archive

Title	『サバルタンは語ることができるか』を共に読み共に書く : 共生学の3 つのアスペクトを中心に
Author(s)	宮前, 良平; 藤阪, 希海; 上總, 藍 他
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 243-275
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88556
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『サバルタンは語ることができるか』を共に読み共に書く
共生学の３つのアスペクトを中心に

宮前 良平 *　藤阪 希海　上總 藍　桂 悠介

要旨

本稿は共生・共創を考えるうえで重要なテクストである『サバルタンは語ることができるか』（スピヴァク 1998 = Spivak 1988）（以下『サバルタン』）の共読を通して、スピヴァクによる表象（代表／表現）の問題意識を共生学の３つのアスペクト（フィロソフィー、アート、サイエンス）から多角的に捉えなおすことを目的とする。第１章では、『サバルタン』の共読の舞台となった読書会がはじまった経緯を述べ、正しく内容を読み取ることを志向しながらも「読みの差異」が生まれたことに着目する。第２章では、共生のフィロソフィーの視点から『サバルタン』におけるスピヴァクの立ち位置を確認する。その際にスピヴァクによる自己言及に着目し、サバルタン連続体の見方を導入することの重要性を述べる。第３章では、共生のアートの視点からテクスト経験をオートエスノグラフィとして表現することを通して、自らのサバルタン性を語り直す。第４章では、共生のサイエンスの視点から調査研究を行う際のサバルタン性との関わりを反省的に描き出す。最後にこれらの「読みの差異」を、ポジショナリティの差異として環状島モデルに布置し整理することで、「サバルタン」と、語る主体としての私との関係性を考察する。

キーワード

サバルタン　ポジショナリティ
共読　環状島モデル
読みの差異

目次

はじめに
1「読みの差異」を通した『サバルタン』の検討
1.1 読書会の経緯
1.2 本論文の目的
2 共生のフィロソフィー：あなたはそれを語ることができるか
2.1 批判者のポジションという問題
2.2 スピヴァクの自己言及
3 共生のアート：知識たる資格のために圧殺された〈私〉の捉えなおし
3.1 私にとっての『サバルタン』の位置付け
3.2〈私〉をめぐる私のオートエスノグラフィ
3.3 知識たる資格のために生み出されるサバルタン的存在
4 共生のサイエンス：研究における再帰性／反省性
4.1 サバルタン概念を通した過去の darstellung- 表現
4.2 戦略としての vertretung- 代表／代弁と自らの加害性への無自覚さ
4.3 研究における政治性への自覚
5 サバルタンについて語る私について語ること：環状島を用いた位置付け
おわりに：共読と共著の往還

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系（現：福山市立大学都市経営学部）；r-miyamae@fcu.ac.jp

はじめに

本論文は本稿と一部著者が重なる前稿（桂・檜垣 2022）における問題意識を引き継ぎながら、人間科学部／人間科学研究科の学部生、院生、教員が参加したガヤトリ・C・スピヴァクの『サバルタンは語ることができるか』（スピヴァク 1998＝Spivak 1988）（以下『サバルタン』）の読書会を事例に、同書を読むという経験やそこから生じる内省をどのように表象（代表／表現）しうるのかを論じる。前稿の問題意識とは、スピヴァク自身を含めた研究者自身の立場性と議論の関係について俎上に載せるべきであるということと、サバルタンと呼ばれる人びとの代理／代弁（vertretung）の不可能性に比べて、研究者がサバルタンを言説の上で生み出す構造を含めて表現／再現前（darstellung）していくことの必要性が十分に理解されていないのではないか、という二点である。これらを出発点に、とりわけ共生学のフィロソフィー、アート、サイエンスという視点から論じることで、今日共生を主題に研究を遂行する際の研究実践をめぐる課題を提示する。

第1章では、まず読書会に至るまでの経緯を述べる。前稿で述べられているように、共生を主題にするうえで、ポストコロニアル理論を参照することには非常に重要な意味があるが、本稿を書く発端となった読書会に関しては、そうした大きな背景というよりも、学生寮の「表象」という、より具体的な出来事が起点となっている。そのうえで、同書を共に読んだ際の「読みの差異」に着目することで、一人ひとりの読み方をリフレクシブに記述するという、本稿の目的を述べる。

第2章では、共生のフィロソフィーとして、『サバルタン』においてスピヴァクがどのようなポジショニングを取っているかを分析する。『サバルタン』は、西洋知識人の不可視化された主体性あるいはポジションを痛烈に批判したわけだが、その批判はまったく同じ形で知識人たるスピヴァクにも向けられる。このような疑義に対し、『サバルタン』本文中でスピヴァクはとある自己言及を行っている。その構造に着目することで、本書におけるスピヴァクの立ち位置を確認する。

第3章では、共生のアートとして、『サバルタン』を読むなかで何が想起さ

れたのかをオートエスノグラフィ（Ellis et al. 2010; 桂・千葉 2021）にして表現する。自らの経験を頼りに、語りえない経験を見つめなおし、自らのサバルタン性を語り直すことで主体の変遷を整理する。

第4章は共生のサイエンスとして、『サバルタン』の視点を踏まえた調査研究は、どのようなものであり得るのかについて論じる。具体的には、調査すること、解釈することが持つ暴力性を内省的に描き出していく。また、大学生という学問的な言説を生産することができる自分自身の属性を捉えなおすことについて実際の研究過程をもとに考察する。

最後に、本稿での多様な「読みの差異」を、スピヴァクにもしばしば言及してきた宮地尚子による環状島モデルを参照し整理することで、各々のポジショナリティと読みの関係性について考察する。これらを通して、共に読まれるテクストとして、同書やサバルタン概念の再考の今日的な意義を示唆する。

なお、執筆の分担としては、第1章を藤阪と上總、第2章と第5章を宮前が執筆し、第3章は藤阪、第4章は上總が担当している。桂は論文の企画や構想、各章導入部やはじめにやおわりに等の部分的な執筆、および草稿に対する批判的な修正を担った。

1.「読みの差異」を通した『サバルタン』の検討

1.1 読書会の経緯

昨年（2020年）、大阪大学大学院人間科学研究科の教員や学生が関わるとあるプロジェクトの広報をめぐって議論が交わされた。問題となったのは、大阪大学生寮、教職員宿舎に加えて、商業区画のテナント、サービス付き高齢者住宅などが整備される「大阪大学グローバルビレッジ津雲台」の入居者募集に際して用いられた写真だ。「大阪大学グローバルビレッジ津雲台」では「留学生を含むあらゆる学生、教職員が同じ場所で生活し、活発なコミュニケーションを可能とする国際的生活環境」[1]の実現や、各種教育プログラムなど様々な「先端的」な試みを謳っている。しかし、同プロジェクトのウェブサイトには、ジェンダーや「人種・民族」に偏りのあると思われる写真が大きく掲載されていた（写真1）。この写真を含むページは2020年6月ごろに公開され、2020年

写真１大阪大学グローバルビレッジ津雲台HPに掲載された写真（現在は差し替え済）

7月に人間科学研究科・人間科学部内で告知、広報がなされた。その際、この写真を「グローバルビレッジ」という「共創」や「共生」ともかかわるプロジェクトを象徴するものとして使うことに疑問を感じた大学院生の桂が、メーリングリストで問題を指摘したところ、他の院生、学部生らからも同様の声があがるなど、波紋が広がっていった。現在、同写真は学寮の建物を写したものと差し替えられている[2]。

これを表象やコロニアリズムについて考える機として捉え、『サバルタン』の読書会がはじまった。人間科学研究科の教員である宮前が提案し、当時学部3年生だった藤阪が主催する形で2020年9月に開始した本読書会は、当初数回の開催で終了する予定であった。しかし、全体を通して一文ずつ丁寧に本文の検討を進めたことに加えて、スピヴァクの主張の理解に想定以上の時間を要し、2021年10月現在までで読書会の開催は10回を超えた。本読書会では、レジュメの担当者が本文を音読したうえで解釈や疑問点を示し、それに応じて他の参加者が新たな見解や疑問を投げかけるというスタイルをとった。本書を読むにあたり要求される知識量が膨大であるにもかかわらず、参加した学生の中にはフーコーやデリダを専門とする者がおらず、前提となる知識を各自で学習するとともに、哲学を専門とする教員による解説が行われた。また、宮原（2010）も指摘するように、本書には誤訳と思われる部分も

あったことから、原文と照らし合わせながら読解する必要に迫られた。さらに、本稿でその一端が示されているように、参加者によって異なる立場から多様な読みの可能性が示唆されることは珍しくなく、時間をかけて議論を重ねた。時に、『サバルタン』に関連する経験を語ったり議論を深めたりする時間も持ちながら、各々の視点で表象の問題に向き合ってきた。

1.2 本論文の目的

本論文では、複数の立場、視点から『サバルタン』を共に読み、共に書くことで、各々の「読みの差異」を浮き彫りにしつつ、同書の内容を共生学の視点から多角的に考察することを目的とする。

スピヴァクの著作は、難解な文章であることが知られており、その読みづらさはつねに批判の的となってきた（宮原 2010）。彼女自身その批判は認めており、特にその難解さが際立つ『サバルタン』については、「あまりにも複雑」であるとし、それは彼女が「経験した苦難のいくぶんでも反映している」のだろうと述べている（スピヴァク 1999: 80）。しかしながら、「易しい文章はだます」（Danius,Jonsson & Spivak 1993: 33) ことが明白である中で、その難解な文体は、従来とは異なる仕方で「様々に異なる歴史や場所や方法論を注意深く結びつけようとする」、スピヴァクによる「計算された意識的な修辞的戦略」（モートン 2005: 19）なのである[3]。

この難解なスピヴァクの著作は、学部生、院生、教員の協働の中でどのように読まれうるのだろうか。ここで参考になるのが、人類学者の太田好信による指摘である。太田は『サバルタン』の訳者である上村らとの対談「スピヴァクあるいは発話の場のポリティクス」において、スピヴァクは発話が構造化されていると主張したのに応じ、読みもまた構造化されているのではないかと指摘した。「スピヴァクのテキストはまさに違ったーテキストが開かれたという意味ではなくー読みが可能であ」（上村・太田・本橋 1999: 63）り、「読みの差異」に注目する必要がある。それは単に様々に解釈ができる、ということではなく、読み手の経験や知識との結びつきの中で読まれる、ということである。この「読みの差異」を明らかにするため、本稿では、共生学の3つのアスペクト（志水 2020）を議論の枠組みとする。理念や議論の前提を問い直していく

「フィロソフィー」と、現状を調査し分析する「サイエンス」、共生の実現に向けて従来の研究では排除されていた感情や主観も重視する「アート」の3つの視点から、それぞれの読みを多角的に記述していく。

その際重要となるキーワードが「サバルタン」である。あらかじめスピヴァクのサバルタン概念について簡単にふれておこう。

スピヴァクは、サバルタンは「それ自体がエリートからの差異として定義される」(1998: 43)ような異種混交的な存在であると指摘した。彼女は「真の」サバルタン集団を、「読み書きのできない農民たち、部族民、そして都市のサブプロレタリアートのなかの最下層に属する男と女たち」(p.36)とカテゴリカルに説明することもあるが、「真の」サバルタンとはみなされなかったとしても、その声や抵抗が聞き取られない限り、語ることができないという意味でサバルタン同様の言説的状況下に置かれうる。事実、『サバルタン』においてスピヴァクが取り上げたのは、中流階級に生まれ、反植民地主義闘争に参加した第三世界の女性、ブヴァネーシュワリー・バッドリーであった。彼女はカテゴリカルな意味においては「真の」サバルタンではない。しかしながら、彼女の自殺＝死を賭した抵抗でさえ、知識人、そして後々の家族の女性からも理解されなかったことをふまえ、スピヴァクは「サバルタンは語ることができない」、つまり、発話行為ができない、その声が聞きとられない、と結論づけたのである(スピヴァク 1999)。このようにスピヴァクにとってのサバルタンは、実在する人々の存在を念頭に置きながらも、言説的な位置づけとの関連において示される相関的あるいは「示差的」(牧 2021: 104)な概念である。

2. 共生のフィロソフィー：あなたはそれを語ることができるか

本章では、共生のフィロソフィーの観点から『サバルタン』におけるスピヴァクの主張を再検討する。スピヴァクによるフーコーやドゥルーズを含む西洋知識人およびサバルタンスタディーズへの批判や彼女自身の自己言及に焦点を当て、「読みの差異」を議論するための前提を整備していく。

2.1 批判者のポジションという問題

『サバルタン』におけるスピヴァクの批判を桂・檜垣（2022）を参考に改めて整理しよう。

スピヴァクは表象（representation）の2つの意味である代表vertretungと表現darstellungが混同されていると指摘する。彼女の批判の論旨をあえて単純化して整理すれば、西洋知識人たちに対しては「あなたたちは被抑圧者は自ら語ることができると言っているが、結局のところあなたたち自身が語っているにすぎない」という批判を展開し、返す刀でサバルタンスタディーズに対しては「あなたたちがサバルタンについて語ることがサバルタンの声を抑圧しているのではないか」と批判する。このような批判点を詳細に検討していくといくつかの問題点が浮かび上がるが、本稿ではその中でも共生学と関連するものを2点指摘したい。

①『サバルタン』における批判は、エリート層に向けた批判にとどまっており、ほんとうのところ他者（スピヴァクが事例にあげるような「サティ」の女性など）には届いていないのではないか。たとえば、『サバルタン』自体がフランス現代思想の受容や利用をめぐるサバルタンスタディーズの「陣地戦」あるいは「内戦」の様相を呈しているという檜垣（桂・檜垣 2022）の指摘もそれにあたる。牧(2021)は以下のように指摘する。

> 結局のところ、サバルタンを究極的な弱者とすることも、主体的な抵抗者とすることも、どちらもサバルタンを研究する研究者の「関心事」に基づく恣意的な規定行為となってしまう。そのため、こうした研究においてサバルタンとして規定された人々は、サバルタンとして規定されたその時点で言説上の主体性を剝奪されているのだということができる。（p.94）

②上記の批判点の発展系であるが、それを語るあなたたちは誰なのかという西欧知識人のポジショナリティを切り崩すような問いかけは、そのように批判するスピヴァク自身にも向けられるべきだろう。スピヴァクの批判は、スピヴァクがこのように学術的な言葉を用いて批判できる人物であるという

時点で、自家撞着に陥っていないか。

> 確かにスピヴァクは、自らがインドについて語ることへの「特権」の「放棄」を言明してはいる(31-32/ 281)。インドについて語ることをことさらに重視するわけではないというその主張はわかる。しかし、ランジット・グハのエリート主義的姿勢を批判しながらも、同時に英語でアメリカにおいて論文を発表・出版するスピヴァクは（フーコーやドゥルーズが無意識であれ意識的であれ第三世界を看過するように）、アメリカの学会でグローバル言語そのものである英語で発言するという、自らのあり方がもつ（無意識的かつ意識的）優位的立場性はやはり保持しつづけているのではないか。事柄がここでは鏡のように反転してはいないだろうか。（桂・檜垣 2022: 35）

①は、「当事者不在」という問題、そして、②は「当事者不在という言説への批判にすら当事者がいない」という問題である。

①の問題系は容易に理解できるだろう。問題として根深いのは、②の問題系のほうであると考えられる。②の問題は、たとえば語りの搾取の問題として現れる。ここで想起されるのが、第159回芥川賞最終候補作に選ばれ、2019年に公刊された小説『美しい顔』をめぐる問題である。詳細な説明は宮前（2019）に譲るが、本小説は著者である北条裕子氏が一度も東北の被災地に訪れることなく、いくつかの手記集やノンフィクションから題材を拾い集めて小説を構成した点に批判の矛先が向けられた。特に東日本大震災の被災地で長期的にフィールドワークを続ける社会学者金菱清氏は「彼ら［被災者※筆者注］の言葉を奪った」と痛烈に批判する[4]。しかし、この金菱氏の主張に同意するにしても、『サバルタン』を読んだ後では「それを言うあなたは誰なのか」と問わなければならないだろう。つまり、被災者の言葉を奪ったという言説は被災者の言葉を奪っていないのだろうか。

このような当事者不在の言説構造を形式化すれば、以下のようになるだろう。

「Xは『…』と語っている」と語っているのは誰か。少なくともXではない。[5]

この形式を取ると、自己語りを除くあらゆる言説が批判の対象となる。Xに被災者を入れれば、「被災者は『…』と語っている」と語っているのは誰か。少なくとも被災者ではないとなり、上述の「被災者の言葉を奪った」と同型である。もちろん、Xにサバルタンを代入すれば「サバルタンは『…』と語っている」と語っているのは誰か。少なくともサバルタンではないとなり、『サバルタン』の主張とも重なる。このような当事者不在に関する批判は、批判をなした者自身にも再帰的に適用されねばならない。

2.2　スピヴァクの自己言及

スピヴァクはこの問題に対してどのように応答しているだろうか。じつは、後に自身の論の軌道修正を余儀なくされた（喜多 2009）ことからもわかるように、本書の内部で十分に対応されているわけではない。それでも、本文中にこの論点に対する応答を意図したと思われる文章が忍ばされている。それは本書31頁から32頁にかけてなされている。

> わたしはインドに生まれ、インドで初等教育から高等教育、そして二年間の大学院課程をふくむ大学教育を受けた。このため、わたしがインドを例に引くと、それはわたし自身の失われたルーツのノスタルジックな探索であると見られかねない。[...] わたしとしては、わたしの主要な企図はそのようなノスタルジアのなかでも実証主義的-観念論的な種類のものを指摘することにあるのだと主張したい。わたしがインドの素材にたよるのは、高度な学問的訓練が欠如しているなかにあって、たまたまインドに生まれ、そこで教育を受けたということが、わたしに歴史の画布にたいするセンスと、日曜大工（bricoleur）にとっては [...] 有用な道具である関連する言語のいくつかへの手がかり、そしてもろもろの学問的形成体についての批判を供給してくれてきたからである。しかしながら、インドの事例は、すべての地域や国民や文化等々の、自己としてのヨーロッパの他者として引き合いに出してもよいような代表例として受けとられるわけにはいかないのである。（pp.31-32）

ここでなぜスピヴァクは読み手に対してこのような注意喚起をおこなっているのだろうか。いくつかのまとまりに分けて考えてみたい。

i. 「わたしは〜受けた」。当事者性の備給。スピヴァクはまず、自身がインド出身であることを主張する。それは自らを本書で批判の的にしたフーコーやドゥルーズのような西洋の知識人との差異を示すものでもある。

ii. 「このため〜見られかねない」。当事者性の備給の否定。スピヴァクは即座にiを否定する。それは、当事者であるから語る資格・能力を持つという権威主義的当事者主義への牽制となっている。

iii. 「わたしとしては〜からである」。能力の強調。スピヴァクはインドを題材に選んだ理由を、インドについて研究する能力があるからだと強調する。それはインドに出自を持ち、インドで教育を受けたことでそういった能力が育まれたことを強調するもので、結果的に一種の当事者性の強調になっている点も見逃せない。

iv. 「しかしながら〜である」。表象への警鐘。とはいえ、最後にスピヴァクはインドの事例がすべてを代表するわけでないことを述べている。あくまで一事例として述べるに過ぎないと念押す。

つまりスピヴァクは、自らの出自を明らかにしたうえで、そのことがサバルタンという題材を分析する能力に結びついていることをアピールする。出自を当事者主義ではなく能力主義に結びつけようとしているとも理解できる。そして、最終的には、インドの事例を代表例としての表象だと受けとってはならないと警鐘を鳴らす。

この箇所を取り上げて、スピヴァクはやはりサバルタンではないのだから本書での主張もまたサバルタンの声を抑圧していると結論づけることはあまりに早計である。ここで注目すべきは、なぜスピヴァクが自らの出自も含めた立ち位置をここで明確にしているのかという点である。

スピヴァクの自己言及から読み取るべきなのは、サバルタンか／否かや、

サバルタンについて語る能力があるか／否かという二律背反的な対立軸を設定することではなく、どの程度サバルタン（あるいはサバルタン的自己）について語ることができるかというふうにサバルタン概念を連続体的に見る見方を導入することの重要性である。その際に必要なのは、真のサバルタンを中心に置き、そこからの距離として、語る主体を布置していく俯瞰図である。もちろんここには、フーコーやドゥルーズのような西洋の知識人も配置されるし、サバルタンについて何も知らない人も（非常に遠い位置ではあれ）配置される。

全体地図に様々な人を布置し、自らを位置づけることは、「サバルタン」という属性あるいはそれを語る能力を持っているかどうかではなく、「サバルタン」と、語る主体である私との関係を焦点化することにつながる。上述した当事者不在の言説構造を変形させよう。つまり、「Xは『…』と語っている」と語っているのは誰か。少なくともXではない、ではなく、「Xは『…』と語っている」と語っている私は何者か。そして、Xと私の関係はどのようなものかという語りなおしによって、語られないものとしてのXを示唆することが可能となるのではないだろうか。『サバルタン』におけるスピヴァクの指摘とも重なるが、「サバルタン」の声を抑圧してしまいうる私を徹底的に自覚することで、抑圧されている者としての「サバルタン」が語りのうちに不在であるという形で現前しうるのである。いわば、分断ではなく連続として見る見方を徹底することが、そこにいるはずのサバルタンがそこにいないというふうにしてサバルタンを浮かび上がらせることができる。

このような連続体を想定するにあたって、まずは、私たち一人ひとりの経験に根ざした語りを語ることから始めなければならないだろう。第3章と第4章では、共生のアート、サイエンスの視点から、「私」について語ることで不在のサバルタンを現前させることを企図する。

3. 共生のアート：知識たる資格のために圧殺された〈私〉の捉えなおし

本章では共生のアートという視点から『サバルタン』を読むなかで、読み手においてどのような経験や感情が呼び起されるのかを見ていく。前章で確認

したように、学術的な論文を執筆する私たちは「真の」サバルタン[6]とは言えない。しかし、それぞれが抱えながらこれまで「語りえなかった」経験を記述することで、不在のサバルタンとの連続性を示しうる。こうした目的のための一つの実践として、以下、個人の感情や内面の開示をともなう「喚起的」な記述（桂・千葉 2021）を行う。まず私（藤阪）がこれまでの研究で語ろうとしてこなかった経験について記述し、そのうえで、『サバルタン』を読む中での気づきを通して、私個人の経験におけるサバルタン概念の働きを論じる。

3.1 私にとっての『サバルタン』の位置付け

スピヴァクの行った知識人批判は、これまで知識としての資格を剝奪されてきた知識が、それとして認められる助けになると考えられる（スピヴァク 1998: 31）。『サバルタン』を読み、本稿を書く過程で生じたのは、私自身の過去の経験と知識の関係の捉えなおしであった。本章で論じたいのは、そうした捉え直しの過程を通した「知識としての資格」についてである。

『サバルタン』を読み始めた当初は、表されているもの（シニフィエ）自体に問題が存在すると捉えていたが、読み進めるうちに、表象する者とされる者を取り巻く力関係などをめぐって表象する側の責任が大きく、特に学問をする人間には逃れられない議論であることを理解した。自分自身の経験を可視化し分析の対象とする、オートエスノグラフィを調査手法とする私には、他者をいかに表象するかという課題に加え、自分自身をいかに表象するのか、またその影響をどう考えるのかという問題も迫ってきた。

読み進めるなかでスピヴァクの理論は、私の経験を記述する手がかりとして、また、これまでの私自身の記述や表現に対する批判として理解されていった。私が研究を通じて記述したい経験とは、小学生時代に教師から指導の一環として受けた心理的・情緒的苦痛という、個人の主観とみなされ、知識として承認を得ることが難しい類のものである。こうした苦痛は、スティグマなどにより当事者の口から明かされにくいうえ、児童の心理的な問題は教師の指導方法ではなく児童の怠慢・能力不足等に帰される傾向にある（大貫 2013）。そうした状況下では、私の経験を語り、知識としての正当性を主張することは困難を極める。それゆえ私は、研究の遂行課程において、自分自

身の苦痛を語ることよりも、研究課題との関係で都合の良い部分を語ることに重きを置いてきた。『サバルタン』を読むなかで、そうした研究の姿勢自体が、語りをめぐる問題の所在を覆い隠しかねないと感じるようになった。

そこで次節では、これまで公に語ってこなかった、抑圧的な指導に由来する私自身の経験を、喚起的なオートエスノグラフィとして記述することを試みる。これにより、自覚せず「知識としての資格」を求めることへの批判につながるものとして、その資格が要求される限り顕在化しない知識の存在を示唆する。

3.2〈私〉をめぐる私のオートエスノグラフィ

私は「半身」を殺した。抑圧的な指導が常態化した教室内で生き延びるために、当時の私は自分の本音を内側に隠し、幾重にも用意した建前というバリゲードが破壊されないように力を注いだ。しかしながら、いつの間にか建前だけが残り、私は自分の気持ちがわからなくなった。意識的に建前から区別された「本音」は、私の心の在り処である「本心」がどこかに消え去ったのと同時に消滅した。やわらかくて、人に優しくしたいと考え、他者や未知との関わりを楽しめるあたたかい〈私〉、すなわち「半身」がいなくなってしまった。いつか〈私〉は帰ってくると考え、喪失感と無力感に駆り立てられるようにして〈私〉を探して待ち続けた。問題である指導から解放されて2年ほど経過した時、〈私〉は「殺された」のだと感じ、その残りかすで〈現在の私〉が出来ているのだと悟った。高校入学後、ついに〈私〉の帰りを待つのをやめ、〈現在の私〉は生き延びるために〈私〉を「見殺しにした」。今振り返ると、〈私〉の帰りを待つのをやめた時、〈現在の私〉は〈私〉にとどめを刺して「殺した」のだと思う。どこから来たのかもわからない〈現在の私〉は、〈私〉が置いていったすべてを活用しながら我が物顔で生きている。

私に関わる、これら複数の主体を整理すると表1のようになる。

表1：私に関わる主体

一人称	示す対象	存在時期
〈私〉	小学6年生の頃から時間をかけて「殺された」存在。私の「半身」[7]。	出生〜小6
〈現在の私〉	〈私〉の代わりに「藤阪希海」の主体となった存在。どこから来たのか不明。今のところ、私の建前と、教室で求められていた「藤阪希海」像が綯交ぜになって生まれたと考えている。	小6〜2021年9月現在
私	「藤阪希海」として存在するものの総体。他者から想定される、一貫した存在としての「藤阪希海」[8]。〈私〉や〈私〉が築き上げたもの、〈現在の私〉や〈現在の私〉が築き上げたもの、精神的なもの、身体的なもの等を含むすべて。	出生〜2021年9月現在

〈私〉、〈現在の私〉、私の関係性は概念として理解されているが、比喩的に図示すると図1のようになる。私は「藤阪希海」という、外側から見た人間であり、図1においては「藤阪希海」部屋として表される。〈私〉は出生当初から私として生きてきており、「藤阪希海」部屋の正当な借人として示される。自分の名義でそこに住む許可を得て、賃貸料も払っているような状態だ。それに対して、〈現在の私〉はどこから来たのか不明なまま、勝手に私の主体として生きている。図1では、大家さんの許可を得ず〈私〉名義の部屋に居候している、身元不明の同居人として描かれる。〈私〉が消え去った後も、〈私〉の用意した家具を使いながら〈私〉名義の「藤阪希海」部屋に住み続けている。

今の私は、浴槽でうずくまっていた当時の〈私〉のため、そして〈現在の私〉の断罪のために研究をしている。家の中で他に泣く場所がなかった〈私〉は、浴槽の中に丸まって「死」の温度に触れた。彼女が無根拠に信じていた、「どこかに今の私のことを説明できる大人がいるに違いない」という祈りにも近い何かを、〈現在の私〉が現実のものにせねばならないと思う。そして、教室で起きた出来事を明るみに出すことで、〈私〉と〈現在の私〉が混在しながら私が生きてきた証明、すなわち彼女がいた証明を果たし、〈現在の私〉の抱える罪を認めてほしい。彼女に報いるとともに、贖罪を始めさせてほしい。

一方で、できるだけ問題を私から切り離し、私については口を閉ざしたい気持ちも持ち続ける。私のことを語る時、〈私〉と〈現在の私〉は分け難い。今

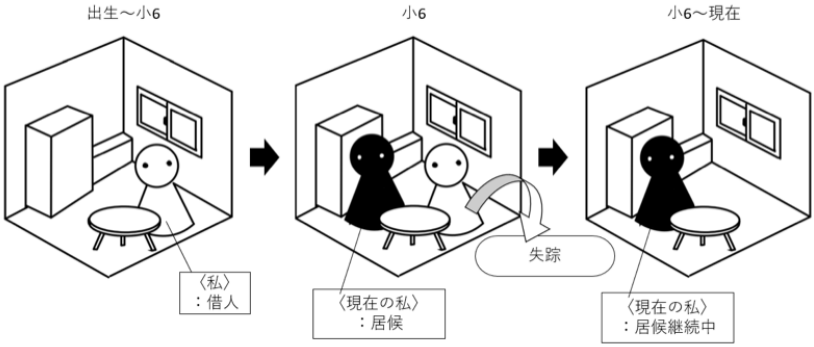

図 1〈私〉名義の「藤阪希海」部屋

この文章を書いているのは〈現在の私〉であるが、〈私〉のした経験は〈現在の私〉のものではなく、〈現在の私〉が感じる苦しさが誰のものか、〈現在の私〉には判別できない。〈私〉は断絶された存在であるにもかかわらず、〈私〉が〈現在の私〉に文章を書かせているのではないかとすら思える。論理的に説明ができず一貫した存在でない私は、正直に語れば語るほど信用を失うに違いないと恐れを抱く。ただでさえ、私の経験を言葉にすると笑い飛ばされたり、「学校ってそんなもん」だから「勘違い」ではないかといなされたりするなど、語りが承認されなかった経験は少なくない。児童生徒に対してはどのような働きかけでも教育的指導として望ましい行為と認識されがちな社会において（内田2019）、私の被害は主張するよりも前に否定されている。私は暗に被害を受けた自分とそうでない自分を切り分けたうえで、自身を信頼に足る存在だと見せかけ、他者から信頼を得ようとしている。

3.3 知識たる資格のために生み出されるサバルタン的存在

本節ではサバルタンが生み出されるメカニズムと、前節で論じた、抑圧を認識する主体としての自己の不確かさとを結び付け、サバルタンの周辺を描き出す行為に関する内省的な批判を行う。研究成果として表されるものは、調査で明らかになった知識であるというだけでなく、「知識としての資格」に

値すると見込まれる知識であり、その見込みが得られなかった知識が背後にあることを示唆する。スピヴァクは『サバルタン』で、女性の表象に際して女性自身によってたくらまれうる沈黙によって差異が包摂されると主張し、サバルタンの差異が表象されないメカニズムを明らかにした。すなわち、ある主体が抑圧的な文脈の中で語ろうとした時、自らよりもさらにサバルタン的な存在を生み出すことで、相対的に承認を得ようとする場合があるということである。

このとき、二重にかき消されたサバルタンへのアプローチが求められる。特に学問においては、「帝国主義的な主体構成の作業に合体していく」ことに批判的立場を取り、知識人が学び知った特権を忘れ去ってみることをスピヴァクは『サバルタン』の中で提案する（pp.72-75）。表されないものの内に語ろうとしても語れないものがあり、語れなくさせているメカニズムを意識することで、表されるものとして認識できるものの幅が広がることが示唆される。

共著として本稿を書くことは私にとって、表されなかったものを表す機会となった。本章は当初、私の内で起きた主体の変遷にほとんど触れない記述を行っていた。執筆の過程で、私の経験をより詳しく明かすことを他の著者から提案された。本章を書き直す中で、私の経験が「知識としての資格」を得る、あるいは、そのための条件を問い直す可能性を感じると同時に、これまで研究者として「自己の影としての他者のたえまない構成に関与してい」た可能性を自覚した（スピヴァク 1998: 29）。私自身が必ずしも一貫性を持たないという事実を記述しないということは、一貫性を持ち得ない主体による知識を知識として認めない規範に加担するということであり、サバルタンを抑圧する行為以外の何物でもない。ただし、一貫性を持たない私の語りや記述が受け入れられる場がなければ、私は理論的に首尾一貫した説明可能な存在のふりをする他なかった。その意味においては、本章で行ってきたのは私一人の記述ではなく、サバルタン概念を共有したうえでの共著という実践全体によるものであった。私の知識がある種の資格を持ちうるものだとして支えられることで、語れなさや沈黙をめぐる問題を自覚し、その克服を試みるができた。

これまで私は、〈私〉と〈現在の私〉の違いを明らかにしないでおこうと思ってきたが、共読・共著をした仲間の姿勢に支えられ、語りの幅が広がった。

本稿で初めて表現できた経験があるだけでなく、これまでの語りによって抑圧される存在の可能性を意識し、知識を評価しサバルタンを生み出すメカニズムそのものへの批判に至った。スピヴァクは、サバルタンを生み出すメカニズムを踏まえて表されるものと表されないものを捉え直させ、表現される事柄を豊かにしたと言えるのではないか。

このように『サバルタン』読書会への参加は、私自身が十分に意識せず行ってきた、自他の声の圧殺に向き合うプロセスであった。

4. 共生のサイエンス：研究における再帰性／反省性

ここからは、共生のサイエンスという視点から『サバルタン』について検討する。本章では、『サバルタン』の読みの一つの結果として、「これは自伝ではない」という一文が冒頭に掲げられるピエール・ブルデューの『自己分析』（ブルデュー 2011）同様、科学的な知の在り方を問う方法として、自己の経験の記述を試みる。まず、4.1 において、スピヴァクのサバルタン概念を子どもに応用し、私（上總）自身の経験と結び付けることによって、過去を darstellung- 表現する。4.2 では、戦略としての vertretung- 代表／代弁の使用と自らの加害性への無自覚さについて述べる。その上で 4.3 において、それら 2 つの経験を結び付けながら、なぜ自らの加害性に無自覚であったのか、その理由について考察するとともに、被害者の抵抗の新たな可能性を探りたい。

4.1 サバルタン概念を通した過去の darstellung- 表現

私は小学校の約 1 年間、いじめの被害にあった[9]。ただし、私がそのいじめという行為によって受けた精神的ダメージは、その言葉が多くの人にイメージさせるであろうものよりは、軽いものだった。むしろ私にとっては、そのことを家族に知られることへの恐怖の方がよほど大きかった。本節では「なぜ私は家族に知られることをこれほど恐れたのか」ということに注目することで、語ることができなかった過去の私を darstellung- 表現する。

多くの場合、ある語りが阻害される理由は、単一のものではない。私がそのいじめという出来事を家族に知られることを恐れたのも、親を含め周りの大人に「良い子」として認められていたイメージを崩したくなかった、あるいは崩すべきではないと考えていた、というのが理由の1つにはあるだろう。しかしながら、最も大きな理由として、そこには2つの意味での恐怖があったのではないかと考えている。まず、私の「無言の抵抗」が否定されることへの恐怖である。教師などの介入や、その結果の加害者からの謝罪を求めなかったのは、「沈黙は、綿密に遂行される計画ともなりうる」（Rich 1978: 23）ことを理解していた私にとっては、「無言の抵抗」が最も現実的で効果的な対応だったからである。だが、ひとたび親に話せば、その判断は否定され、解決すべき問題として親が介入することで「無言の抵抗」という戦略は失敗してしまう。もう一つは、私の言動が書き換えられることへの恐怖である。私がその困難な状況にいると親などに知られると、私にとっては全く関係のない過去の言動さえも、周りの大人たちによって意味付けられてしまうかもしれない。そして、私にとっての「真実」は書き換えられてしまう、そのことへの隠微な恐怖があった。

ここにサバルタンの「語れなさ」をみることができる。私は当時、「真の」サバルタンではなかった。経済的・人種的マイノリティではなく、学校内外において自分の努力と能力が認められる環境にいた。また、前述したようにいじめという出来事自体の精神的影響が大きかったわけでもない。よって、私がサバルタンであったと主張できるのは、ごく限定された意味においてでしかない。しかしながら、自分の意思が否定され、あるいは書き換えられてしまうことへの恐怖がありながら、そのことが間違っているとは思えなかったし、大人が正しいという考え方を捨てることはできなかった。その意味において、子どもとしての私はやはり、サバルタン性を持っていたのである。

私のような「語る」ことができない経験は、程度の差こそあれ、多くの子どもが経験しているのではないだろうか。子どもは、言語形成の段階において、自分の言葉で「語る」ことが難しい。言葉は周りから定義付けて与えられ、またその語りは誤ったものとして書き換えられてしまうからで

ある。大澤（1996）が主張するように、「語る」ということは、「単に言語能力をもっているか、ということではない。自分が何者であるか、自分が何をしているか、自分が何を欲望しているのか、自分の利害に合致していることは何か」（p.298）を知っているということなのである。その意味において、子どももまた、異種混交的なサバルタンであると言えるだろう[10]。

近年、不登校などそれ自体が問題として既に認知されているものについては、過去の研究の在り方を疑問視し、子どもを主体化してその声を聞き取ろうとする研究は増えてきている（e.g., 井倉 2016; 柴・宮良 2017）。しかし、だからといって、フーコーやドゥルーズが「被抑圧者たちは、もし機会をあたえられたならば、[…] かれらの置かれている状態を語り知ることができる」（スピヴァク 1998: 36-37）と主張したように、「子どもは、もはやサバルタンではない。語ることができるのだ」と主張することはできない。大人たちは根本的に、子どもという「純粋なサバルタンをロマンティックに考えてそれに愛着を抱いている」（スピヴァク 1999: 81）からである。実際、子どもを大人に属する者として捉え、その言動を自らの思考の枠においてのみ判断することの問題性に気づかず、その正当性を主張する大人も未だに多い。そうした傾向は、3.2 における藤阪の経験からも示唆されている。そのような大人たちが、自らの権力性を自覚し、意識的にせよ無意識的にせよ、子どもの声や抵抗を抑圧し、ないものとしてしまっている現状を認識しない限り、子どもはサバルタン地位から抜け出すことができない。

ただし、「子どもは全てサバルタンである」と主張することは、子どもを一枚岩的に見なすことになる。そうした主張には、「『サバルタン』という言葉が、自分の持っていないものをほしがっている、どのグループにも当てはまる決まり文句のようになってしまっている」（スピヴァク 1999: 82）という指摘通り、より周縁化された子どもたちの存在を不可視化してしまう危険性もある。しかしながら、第 2 章において宮前が指摘したように、重要なのは「どの程度サバルタン（あるいはサバルタン的自己）について語ることができるかというふうにサバルタン概念を連続体的に見る見方を導入すること」である。その連続体の中で私の経験を提示することに

よって、「真の」サバルタンではないからこそこれまで見えてこなかった、子どもの語れなさの問題を可視化し、この経験を darstellung- 表現できるのだとも言えるだろう。

4.2 戦略としての vertretung- 代表／代弁と自らの加害性への無自覚さ

サバルタン連続体としての見方は、前節のような darstellung- 表現の可能性を開くとともに、自らが強者（周縁の中でも中心側）の立場にいる時には、戦略として用いることもできる。本節では、研究の過程におけるそうした戦略とその際に持ち得る加害性について論じる。

スピヴァクは、人々は「本質主義者であらざるを得ないからこそ、本質主義の単純化できない契機を、戦略の一部として意図的に用いることができ、それは無自覚に『悪い』戦略となり得る一方で、自覚的に『良い』戦略の一部として用いることができる」（Harasym 1988: 66）と主張する。これはいわゆる「戦略的本質主義」として知られるが、この戦略の持つ可能性と危険性が最も明確になるのが、女性に関する問いである（スピヴァク 1998: 72)。

私自身、女性であるというマイノリティ性を持ちながら、人種、学歴、経済的にはマジョリティである以上、この問いを考えざるを得なかった。そして、自分の研究において、女性という属性をあえて本質主義的に「良い」戦略として用いることで、痴漢という性犯罪を軽視し、矮小化する風潮を作り出す社会の問題性を指摘しようとした。その一例として、インタビュー協力者 B が語った、後輩が被害を周りに打ち明ける場面を取り上げた。以下がその際の一連のインタビューの内容である [11]。

（B）その子（Bの後輩）は、部活の前に着替える時に、笑いながら「朝さわられてん」みたいな、、笑いながらやったから、あまり深刻に受けてないって、

（筆者）笑いながらっていうの、どう思った？

（B）軽いなと思ったけど、それは本心か分からんやん。気持ちを紛らすのにそうしたかもしれへんし。気持ち悪いのは悪いって言ってたから

（筆者）その時周りの人はどんな反応？

（B）え、うっそ、みたいな感じ。テンションは結構、そんなことあったん〜！って感じ。皆周り笑ってるけど、内心そんな笑ってない子もいるんじゃないかって

（筆者）なるほどね

（B）でもなんか、それは後輩がいる時で、先輩、Bらの同期がいる時は、なんか、みんなで「え、、」みたいな。その子も笑ってたけど、、

（筆者）結構「そこは笑う場所なん？」って感じで？

（B）え、その時は、笑ってたけど、うーんみたいな。

被害者である後輩自身が笑いながら被害を打ち明け、それを聞いた周りも笑っていたが、B自身はその状況に違和感を抱いており、他にもそう感じた人がいたのではないかと述べている。私はこの場面について、「被害者が被害を打ち明けることで求める援助や反応は様々であり、このような打ち明け方やそれに対する周りの反応を一概に問題視することはできない」と前置きした上で、「性犯罪である痴漢被害を笑って打ち明けるなど、実際に受けたであろう影響よりも軽く語られるのは、『痴漢に遭うことは仕方がない』、『大したことではない』というような、痴漢を軽視する社会の痴漢神話を被害者自身が内面化しているからであろう」と指摘した。

あくまでも、ここで私が主張したかったのは、被害者自身が被害を笑って打ち明けたという行動の問題性ではなく、そのような行動を取らせる社会の問題性である。だが、もしかすると、その「笑う」という行動の裏には、彼女なりの何らかの意図があったのかもしれない。その可能性を鑑みず、被害者である彼女を客体化し、そのような風潮の犠牲者として示すことで、間接的であったとしても「善き社会の設立のためのシニフィアン」（スピヴァク 1998: 83）として彼女を用いてしまったのである。

スピヴァクは、サティとなった女性たちの声が、「家父長制と帝国主義、主体の構築と客体の形成のはざまにあって、……ある一つの暴力的な往還のなかへと消え去っていく」（p.109）と指摘する。一方ではイギリス人が「茶色い女性たちを茶色い男性たちから救い出」そうとし、他方ではインドの

土着主義者が「女性たちは実際に死ぬことを望んでいた」と主張する中で、「だれも女性たちの声―意識を証言したものに出会うことはない」（pp.81-82）。それと同様に、彼女の笑うという行動は、加害者側とされる男性からは、被害は大したことないということの証明として使われ、一方で被害者側に立つであろう女性からは、社会の問題性を指摘するものとして用いられる[12]。その中で、彼女の主体性や抵抗の可能性が見出されることはない。女性という面からすると、「土着のエリート」である私自身も、その抑圧の加担者になってしまったと言えるのではないだろうか。つまり、同じ女性であるということが、意図的な「良い」戦略であったはずが、無意識的な「悪い」戦略に横滑りしてしまったのである。

4.3 研究における政治性への自覚

以上、抑圧される被害者としての経験と、調査における加害者としての経験を述べた。私は、過去の自分の経験を通して、「語る」ことができない恐怖を知っていたはずであった。さらに、私は読書会以前から、vertretung- 代表／代弁が持つ危険性や暴力性には自覚的であった。それにもかかわらず、なぜ研究の過程において、自らの加害性に気づくことができなかったのか。弁明ともなってしまうが、その理由を 2 つ、ここで述べておきたい。

まず、そもそも、私は今回共読・共著をするまで、これら二つの経験の中に「サバルタンの語れなさ」という共通項を見出すことができていなかったからだと考えられる。私は、読書会を通して丁寧にスピヴァクを読む中で初めて、自分の研究にサバルタンを抑圧する加害性を見出すことができたのであり、さらに本稿で過去の経験を darstellung- 表現することで初めて、自分が抱いていた恐怖の正体を知り、サバルタンの抑圧という構造がそこに存在したこと、私は被害者であることに気付くことができた。だが、それ以前は、これらの 2 つの経験は別個のものでしかなく、「自分の生の条件以上のもの」（スピヴァク 2009: 104）、つまり今の自分の問題意識を形成するものにはなっていなかったのである。

2 つめは、研究という実践自体が、vertretung- 代表／代弁を通してサバ

ルタンへの「応答責任」を負うものだからだと考えられる。つまり、研究における vertretung- 代表／代弁に見出し得る意義の 1 つは、語れない人たちの直面する問題を明らかにすることで、傍観者の立場にいる人たちに、社会の問題の深刻さを指摘し、変革のきっかけにできることである。そのため誤解を恐れずに言えば、サバルタンの多様性や、その抵抗の可能性に目を向けずに、彼／彼女らを被害者としてのみ示す方が、問題の深刻さは伝わりやすいのである。その意味で研究者は、対象者を抑圧する加害者となり得る立場にいる。しかしながら、その問題が社会に認識されることによって、長期的には自らを助けるものだという考えがあるからこそ、対象者は研究に協力することに意義を見出し、その過程で心理的負担や、自身の語りが解釈されることへの不安を持ったとしても研究者に歩み寄るのだろう。もちろん、対象者と研究者の間に何らかの「連続体」を形成し得るものがある場合は、そうした加害や抑圧の可能性は低くなる。私が行った研究は、女性というジェンダーを意図的に「戦略」として用いるものであった。そのため、私は研究を行うことにより「応答責任」を果たすという大義名分をつねに意識せざるを得ず、その結果、被害者を客体化することも、仕方がないという「甘え」が、自分の中にできてしまったのだと思われる。

ここで必要だったのは、スピヴァクの言う「想像力」であろう。彼女にとって「想像力」とは、「片方の手でもう一方の手を引っ張ることによって生み出す抵抗のようなもの」（スピヴァク 2009: 102-103）であり、自らの考えや価値観とは異なることを、意図的に読み取ろうとする努力があってこそ生み出されるものである。よって、ここでは、この被害者が自身の被害を笑って打ち明けたということに関して、主体的な抵抗のしるしを介入主義的に見出してみたい。

今の社会においては、多くの若者が痴漢は性犯罪であり、深刻な問題と認識していると考えられる。これをふまえると、Bの後輩が、痴漢被害を友人に打ち明けて笑ったのは、「痴漢は深刻な被害だ」という共通認識があるという前提のうえで、あえて「大したことない」というメッセージを、「笑う」という行動を通して周りに伝えることで、加害者や社会への間接的で些細な抵抗を行うためであった、という風に読み取ることができるだ

ろう。だが、これに対して、友人たちはその表面下の抵抗を読み取ることができずに「大したことない」という表のメッセージだけを受け取った。そのため、疑問を抱きながらも、被害者に笑って答えるという行動を取ったのであり、結果的に、彼女の抵抗は成功しなかった。

もちろん、これはあくまでも解釈の可能性であって、そのような意図を被害者が実際に持っていたかを知ることはできない。しかしながら、誰かを vertretung- 代表／代弁して語ろうとするとき、重要なのはそこに存在し得る抵抗の可能性、そして、サバルタンの考えを間違っているとして語りを聞き取ろうとしない自らの加害性につねに目を向けておくことではないだろうか。スピヴァクが主張するように、「長い目で見て最終的に効果的であるためには、（サバルタン的女性の）沈黙化についてはわたしたち自身も共犯関係にあるということを承認することが重要であ」（スピヴァク 2003: 449）り、自分は加担者にはなり得ないという認識を持つかぎり、いかなる研究や実践も成功することはないのである。

5. サバルタンについて語る私について語ること：環状島を用いた位置付け

本章では、第 3 章での藤阪の語りと第 4 章での上總の語りを、「サバルタン」との関係において理解していく。本書『サバルタン』の読書会を通じて得られた読みの差異は、それぞれの経験してきたことの違いに端を発する。それは、「サバルタン」について語るときのポジショニングの差異として現れる。

本稿で記述してきたポジショニングの差異を、環状島モデル（宮地 2018）に配置しながらサバルタンと発話者の関係のダイナミズムについて理解を深めていこう（図2）[13]。環状島モデルとは、医療人類学者の宮地尚子が考案したトラウマの当事者や支援者の発話力を示すモデルである。本モデルのポイントはトラウマをめぐる語りには中空構造、つまり、そのトラウマの中心部に近ければ近いほど語りにならないという領域があるということである。中心

部である〈内海〉には死者や、言葉にならない奇声を発する者、沈黙を貫く者たちがいる。

環状島には、語りが生まれない〈内海〉を中心に外側に行くにつれ〈内斜面〉〈尾根〉〈外斜面〉〈外海〉がある。〈尾根〉を境にして、内側に当事者、外側に非当事者がいるというイメージである。〈内斜面〉には、〈内海〉とは異なり、当事者の中でも言葉を発することができる状態にある生還者たちが位置する。語る力は〈内斜面〉を登るにつれて力を増し、〈尾根〉に至るとピークに達する。〈外斜面〉には、支援者たちが位置する。支援者たちはあくまでも当事者にはなれない。しかしながら、支援へのコミットメントが強まると〈外斜面〉を登りきり、〈尾根〉に到達し、当事者たちを引き上げる手を差し伸べることができる。環状島の周りには〈外海〉がある。〈外海〉もまた〈内海〉と同じく、語りの生まれない領域であるが、その性質は異なっている。そこには傍観者たちや見て見ぬ振りをする者、環状島の存在に気づいていない者がいる。これら環状島の各領域に本稿での二人（藤阪・上總）の語りを位置づけながら、サバルタンとの関係性のダイナミズムを検討する[14]。

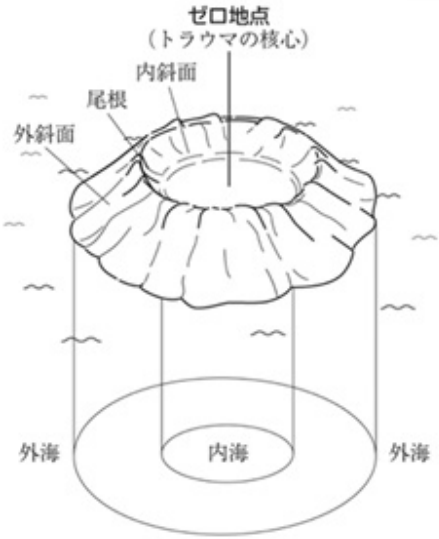

図 2 環状島モデル（宮地 2018）

まず、〈内海〉には語らない者として「サバルタン」が位置するだろう。第2章で指摘した通り、「サバルタン」についての語りはつねに発話力を持つ者による語り（＝騙り）となって現れる。スピヴァクによる西洋知識人たちおよびサバルタンスタディーズへの批判はこの点に端を発する。しかしながら、そのような批判さえも〈内海〉からではなく陸地のどこかから語られているという点には気をつけなければならない。

第3章での藤阪の語りは、〈内斜面〉からの表象（darstellung-表現）として捉えられる。学校での抑圧的な指導のために、〈私〉と〈現在の私〉が切り離されたとする藤阪の自己理解は、〈内海〉から這いずりだして〈内斜面〉にたどり着いた姿としてイメージされる。藤阪は部屋のメタファーを用いて、〈私〉と〈現在の私〉の断絶を説明していたが、環状島に引きつけてみると、脱皮した抜け殻としての〈私〉を〈内海〉に沈めて、〈内斜面〉にしがみついているような印象も受ける。

第4章での上總の語りは、〈外斜面〉からの語りとして捉えられる[15]。上總は、子ども、そして女性としての自らのサバルタン性に着目しつつも、自らは「真の」サバルタンではないと述べる。それは特に研究者としての立ち位置を自覚した後に顕著である。そこで述べられたのは、Bとのインタビューの中で語られた、痴漢の被害経験を笑って告白したBの後輩の語りをいわば上總自身の研究関心に従って解釈しなおし、表象（vertretung-代表／代弁）してしまったということへの自戒である。〈外斜面〉を登り、〈尾根〉から〈内斜面〉や〈内海〉を見下ろすときに、支援者が雄弁に語ってしまうことは、当事者の口を噤ませることにつながりかねないことが示唆される。

藤阪、上總の二人に共通するのが〈内海〉への視点である。両者ともに、第2章で論じた「サバルタンは『…』と語っている」と語っている私は何者か。そして、サバルタンと私の関係はどのようなものかというサバルタン連続体に沿った捉え方がなされている。藤阪の場合は、〈私〉を抑圧することで、一貫した主体としての私を認識していたが、今の私が内海に沈む〈私〉との関係性によって存在していることを捉えなおしている。上總の場合は、語る力を持つエリート的な自己を自覚しつつ、「真の」サバルタンと自らの距離を慎重に見極めている。

このようなあり方は、環状島のモデルに当てはめてみると、環状島の〈水位〉を下げる効果をもたらしていると考えられるだろう。〈水位〉が上がれば、今まではなんとか語れていた人が語れなくなるし、その逆に〈水位〉が下がれば、語りを承認する社会の雰囲気が醸成され、語りはじめる人が増える。『サバルタン』でスピヴァクが指摘した表象(表現／代表)の問題はまさに、環状島の〈水位〉を上げてしまうことへの警句であった。つまり、「サバルタン」の語りを代弁したり、一般化したりするのではなく、それを語る私が〈内斜面〉にいるのか〈外斜面〉にいるのか、〈内斜面〉や〈外斜面〉のどのあたりに位置しているのかに十分自覚したうえで、語り始める必要がある。サバルタンについて語る前に、サバルタンについて語る私について十分に語ることが、表象(表現／代表)の暴力を軽減することにつながるだろう。

おわりに：共読と共著の往還

以上、本稿では、『サバルタン』の読書会を契機として立ち現れた、様々な「読みの差異」のうち2つを記述してきた。もちろん、読書会参加者の分だけ存在する読みの差異のうちの一部しか記述していないという点は本稿の目的を必ずしも十分に達成できたとは言えないかもしれないが、これらの記述を重ねていくことにより、サバルタンへの連続性の一端が示されたと言えるだろう。このことは宮地の環状島モデルを用いることで、より一層明確になった。

ただし、こうした差異の在り方はあらかじめ自明であったわけではない。読書会や本稿を通して見えてきた「読みの差異」の多くは、おそらく一人で読み進め、執筆するだけでは気づかなかっただろう。この意味において、「読みの差異」もまた、他者との協働の中で浮かび上がる示差的なものだと言える。

『サバルタン』の文体はその分かりにくさがゆえに、協働を必要とし、それぞれの視点や意見を交換し合う契機となった。その過程をふり返ると、共に読む、という過程においては、同じテクストを同時に読み進めるという同一性の中で「スピヴァクは何を言おうとしているのか」が探求されていた。言い換えるとそれは「スピヴァクはこう言っている」という vertretung-代表／代弁の過程であった。一方、執筆という過程においては、それまでの研究と関連

づけたり、これまで語りえなかった経験が記述されたり、各々の研究を再帰的にふり返ったりといったことが自覚的になされた。異なる角度から著者それぞれの経験がdarstellung-表現されることとなった。

つまり、読書会を通してテクストを読むという同一性や共通性の探求があったからこそ、共著の過程において「読みの差異」が明確となっていったのだと考えられる。こうした研究における、ある種の同一性が求められるvertretung-代表／代弁と、実践における多様なdarstellung-表現の往還によってこそ、サバルタンとの連続性を紡いでいくようなスピヴァクへの一つの応答がなされうる。

今後の課題としては、「共生」や「共創」という、ともすれば目に見えた成果が求められがちな領域において、いかに「わかりにくい」問題に対する、協働の機会を設けていけるか、ということが挙げられる。本稿のもととなる読書会が始まるきっかけとなったのも、学寮に関する一枚の写真であったが、そこに現れる問題への指摘が他の者への共感を呼び、共読や共著という実践へと展開していった。こうした展開も、表象をめぐる一見「わかりにくい」問題が存在するからこそ生じたものだといえる。『サバルタン』を通してみると、当該の写真は、大学という権威を持つ機関による、偏りのある「グローバル」社会の表象（vertretung-代表／代弁）であり、またそれが無批判に掲載され、拡散されていくという構造が表象（darstellung-表現）されているという問題であった。こうした問題の背後には、今日表層的に語られる共生、共創やグローバル社会、ダイバーシティ等の影で抑圧される人々の、未だ聞かれていない無数の声が存在するはずである。差異を示す「表現」と同一性を求める「代表性」に自覚的になりつつ、その両者を往還することによって、「サバルタン」の語りの静かな豊かさを涵養することが可能となるだろう。

本稿が、そうした新たな協働に向けた一つの起点や参照点となれば幸いである。

注

1　大阪大学グローバルビレッジ「総長からのご挨拶」https://globalvillage.icho.osaka-u.ac.jp/tsukumodai/index.html（2021/10/20アクセス）

2　大阪大学グローバルビレッジ「学寮について」https://globalvillage.icho.osaka-u.ac.jp/tsukumodai/dorm.html#link_rt（2021/10/20アクセス）

3　こうした意図的な実践としての記述はしかし、誤解を招くものでもあった。『サバルタン』も、「いわゆるポストコロニアル批判以降、人文系学問全般に投げかける『他者表象』をめぐる問題を、もっとも深刻に、かつ適切に表現している論文の一つ」として（太田 1998: 201）、またサバルタンスタディーズやサバルタン概念を世界に広めた著作として評価を得る一方（粟屋 1999）、サバルタンは実際に語っているということを、スピヴァク自身が理解していないのだ、という批判もあった（スピヴァク 1999: 80）。

4　https://news.yahoo.co.jp/byline/ishidosatoru/20180707-00088468（2021/10/29アクセス）

5　そして、この言説構造は以下のように無限後退する契機を有している。

「…「「Xは『…』と語っている」と語っている」…」と語っている」と語っているのは誰か。

このとき、語っているのは誰かという長大に続く伝言ゲームに目が取られ、そもそも何について語っていたのかが次第に忘却される。「少なくともXではない」というXについて否定する文は、そこに否定文があったという一点においてXの存在を留めていた。しかし、疑問文の後退がある閾値を超えると、「少なくともXではない」という文章そのものが枠外に置かれるようになる。こうして、当事者の不在は、最初から当事者などいなかったかのように思われてしまう。当事者の座はこのようにして抹消された形で規範化されうると考えられる。

6　真のサバルタンと本稿で記述するとき、サバルタン的な性質を本質的に持つ人びとを想定するのではなく、サバルタンの中でもより語りえなさを強いられている人びとを想定している。そもそも、サバルタンとは語りを発さない者を指す概念であり、1.2でも注意深く述べたように、サバルタンとは関係性の中で生じる示差的（differential）な概念である。さて、1.2でも述べたように、スピヴァクは『サバルタン』において「読み書きのできない農民たち、部族民、そして都市のサブプロレタリアートのなかの最下層に属する男と女たち」（p.36）と真のサバルタンを定義するが、この箇所もまた本質主義的な解釈ではなく、相関主義的に解釈するべきだろう。つまり、彼ら彼女らは、自ら声を発することができないのみならず、かろうじて発した声すら他者に奪われてしまう点において、サバルタンの中でもさらに語りの不可能性に直面しているのである。

7　「私の『半身』」と言うとき、「藤阪希海」の「半身」、すなわち「藤阪希海」から切り離された存在だけを指す。ゆえに、私の「半身」は1つしか存在しない。あえてもう片方の「半身」を挙げるとすると、〈私〉が築いて残していったものと〈現在の私〉を足した部分。図1においては、〈私〉名義の「藤阪希海」部屋という空間、そこに置かれている家具、居候継続中の〈現在の私〉のこと。

8　普段書いたり話したりした時に説明なく「私」と述べると、一貫した存在として認識されるので、ここでも「私」にカッコや特別な説明はつけない。

9　ここにおける「いじめ」の定義は、「弱い立場の人に対して、意図的に攻撃的な行動を繰り返すこと」(Wolke and Lereya 2015: 879）であり、そこに含まれる行為としては、社会的排除や噂話の拡散などがある。

10　子どもをサバルタンとする解釈は、例えば小玉（1996）なども行っている。小玉（1996）は、近代においては、子どもについて不登校や不良少年など様々な問題が指摘され、それとともに親の責任が問われるようになったが、そのような中で「子どもを守るべき親」と「沈黙する子ども」の関係性が強化され、結果として子どもをサバルタン地位に留めさせるものになっているのではないかと指摘している。

11　この語りは、上總が著者を務める卒業論文「若者は痴漢に関してどのような意識を持っているか―痴漢神話の実態調査を中心として―」の調査の一環として、2021年1月に行ったインタビューからの引用である。研究倫理については、本調査を行うにあたって、指導教員からしかるべき指導を受けている。また、本稿の掲載にあたってはBの許可を得ている。

12　痴漢の被害者は、決して女性だけではなく、また加害者も男性に限定されるものではない。しかしながら、やはり痴漢の多くが、男性-加害者、女性-被害者の構図でなされていることから、このような表現を用いている。

13　本章での環状島モデルの説明については、宮地（2018）および宮地（2021）に多くを負った。

14　本章での記述は宮前が担当したわけだが、このような記述の仕方もまた、藤阪や上總の語りを代表せしめてしまっている点は留意すべきだろう。もちろん、読書会や本稿の執筆の打ち合わせを通してお互いの考え方を十分に共有した上で執筆しているのだが、とはいえスピヴァクに言わせれば、これもまたvertretung-代表／代弁の問題を内包していることになるだろう。この点に関しては、本脚注にて宮前が執筆者である旨を示すことでわずかでも対応できればと思う。

15　上總の語りにあるように、彼女の子どもの時のいじめ経験は〈内斜面〉的であることも忘れてはならない。しかし、本章では特に共生のサイエンスとの関わりにおいて、研究者ならびに支援者としてサバルタンに接近する際の〈外斜面〉に着目した。

参照文献

日本語文献

粟屋利江
1999「『サバルタン・スタディーズ』の軌跡とスピヴァクの介入」『現代思想』27(8): 211-225。

井倉未樹
2016「不登校経験の語りをきく――当事者の経験の意味づけとその過程――」『神戸大学発達・臨床心理学研究』15: 35-42。

上村忠男・太田好信・本橋哲也
1999「スピヴァクあるいは発話の場のポリティクス」『現代思想』27(8): 42-67。

内田良
2019 『学校ハラスメント：暴力・セクハラ・部活動―なぜ教育は「行き過ぎる」か』東京：朝日新聞出版。

大澤真幸
1996 「語ることの（不）可能性」『現代思想』24(5): 292-304。

太田好信
1998 「存在しえなかったものを回復する」『現代思想』26(12): 200-207。

大貫隆志（編著）・住友剛・武田さち子
2013 『「指導死」：追いつめられ、死を選んだ七人の子どもたち。』東京：高文研。

桂悠介・千葉泉
2021 「人間科学における『喚起的』記述の意義と課題：オートエスノグラフィー、『自分綴り』の実践から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』47: 185-203。

桂悠介・檜垣立哉
2022 「『サバルタンは語ることができるか』を読み直すために：共生のフィロソフィーの視点から」『共生学ジャーナル』6: 23-57。

喜多加実代
2009 「語る／語ることができない当事者と言説における主体の位置：スピヴァクのフーコー批判再考」『現代社会学理論研究』3: 111-123。

小玉亮子
1996 「語らない子どもについて語るということ――教育『病理』現象と教育研究のアポリア」『教育学研究』63(3): 286-293。

柴裕子・宮良淳子
2017 「登校していた時期から不登校となり、不登校を続けていく当事者の思いのプロセス」『日本看護研究学会雑誌』40(1): 25-34。

志水宏吉
2020 「私たちが考える共生学」志水宏吉・河森正人・栗本英世・檜垣立哉・モハーチ、ゲルゲイ編『共生学宣言』大阪：大阪大学出版会。

スピヴァク、ガヤトリ C
1998 『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳、東京：みすず書房。

1999 「サバルタン・トーク」吉原ゆかり訳『現代思想』27(8): 80-101。

2003 『ポストコロニアル理性批判：消え去りゆく現在の歴史のために』上村忠男・本橋哲也訳、東京：月曜社。

2009 『スピヴァク、日本で語る』鵜飼哲監修、本橋哲也・新田啓子・竹村和子・中井亜佐子訳、東京：みすず書房。

ブルデュー、ピエール
2011 『自己分析』加藤晴久訳、東京：藤原書店。

牧杏奈
2021 「『サバルタン』研究―概念的な特性と意義―」『明治大学社会科学研究所紀要』59(2): 93–108。

宮地尚子
2018 『環状島＝トラウマの地政学（新装版）』東京：みすず書房。

2021 『環状島へようこそ　トラウマのポリフォニー』東京：日本評論社。

宮原一成
2010 「スピヴァクは読まれることができていたのか―特に日本において」『英語と英米文学』45: 103-127。

宮前良平
2019 「『被災者の言葉を奪った』とはどういうことか：小説『美しい顔』をめぐる論争から」『未来共生学』6: 426–432。

モートン、スティーブン
2005 『ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク』本橋哲也訳、東京：青土社。

英語文献

Danius, Sara, Jonsson, Stefan and Spivak, Gayatri. C.
1993 A Conversation with Gayatri Chakravorty Spivak: Politics and the Imagination. *boundary2* 20(2): 24-50.

Ellis, C., Adams, T. E., and Bochner, A. P.
2011 Autoethnography: An Overview. *Historical Social Research*, 36(4): 273-290.

Harasym, Sarab
1988 Practical Politics of the Open End - an Interview with Gayatri Chakravorty Spivak. *Canadian Journal of Political and Social Theory* 12(1-2): 51-69.

Spivak, Gayatri Chakravorty
1988 Can the Subaltern Speak?, in Cary Nelson/ Lawrence Grossberg (eds.) *Marxism and the Interpretation of Culture*, Macmillan Education: Basingstoke. 271-313.

Rich, Adrienne
1978 *The Dream of a Common Language*. New York: Norton.

Wolke, Dieter and Lereya, Suzet T.
2015 Long-term effects of bullying. *Archive of Disease in Childhood* 100: 879–885.

Co-reading and Co-writing "Can the Subaltern Speak?": Focusing on the three aspects of Kyosei studies

Ryohei MIYAMAE

Nozomi FUJISAKA

Ai KAZUSA

Yusuke KATSURA

Abstract

This paper aims to reconsider Spivak's concept of representation (vertretung/darstellung) from the perspective of the three aspects of kyosei studies (philosophy, art, and science) through a co-reading of her critical book "Can the Subaltern Speak?" (Spivak 1988). Chapter 1 describes how the reading group of "Subaltern" began and focused on how "differences in reading" appeared while aiming to read the contents correctly. In the second chapter, we confirm Spivak's position in "Subaltern" from the perspective of Kyosei philosophy. In doing so, we focus on Spivak's self-reference and explain the importance of introducing the view of the Subaltern continuum. In Chapter 3, I (Fujisaka) narrate my own Subaltern story through an autoethnography of my personal experiences from the art of Kyosei. In Chapter 4, I (Kazusa) reflectively depict the relationship with Subalternity when researching from the perspective of Kyosei science. Finally, by arranging these "differences in readings" as differences in positionality in a circular island model, we examine the relationship between "Subaltern" and myself as a subject of narration.

Keywords : Subaltern, co-reading, differences in reading, positionality, circular island model